

912.3

7

空田太轍

源太夫

耶鄭

放生川

天轍

藉羽

栴枝

金札

唐取

吳服





ワニ大匠付

○ 面古を教

太教、  
他り初教

脇入

為僧子振衣大口腰帯  
肩トモ言也

押乞を扶系院お侍之命所長下也相也

内裏あり七田此管経の口入兼後者津の

お天のまのちのりのしのるのとのりのての徳なるのをの教

上の子の相の所の乞のをのりのての用の上のりの教

位の者の此の樂の人の此の面の古のとのりのての乞のものおのりのぬ

右の教の乃の上の子の相の所の乞のをのりのての用の上のりの教

五



いさげし あはれ ともす あはれ なる人 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ

いさげし あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ 徳 あはれ











人の心はあはれに思ふはる物なり

世にこそ <sup>て</sup> 難く <sup>て</sup> 世を對人 乙の甲 床衣キル

とすまはれ <sup>て</sup> 東と <sup>て</sup> ぬ郡人の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> を

回念せ <sup>て</sup> 老と <sup>て</sup> 思 <sup>て</sup> けり <sup>て</sup> 作 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心

御 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

衣 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

皮 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

樂人の心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

を <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

似 <sup>て</sup> する <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

母 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

不 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

との <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心

福 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> 念 <sup>て</sup> の <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心 <sup>て</sup> あり <sup>て</sup> 心











二 評ふれしを教れ役をりしを同中  
三 名の下むりかへ流すもひもや孤る屋  
上 室やか人の悪く志は心の害味て夢  
四 業をうらみ人 恨の吾教さうら登  
五 ぬけまのい命子扶業をうらま  
六 又お世やり代と成もさうらぬお徳ふ 上 泰  
七 平業をうらまよ 芋田と成るおさうらぬ

五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百











御もまた雲霧園屋門扇敬光とみら  
くして携も妙方侍を扱乃通其金  
乃砂をきき回方のゆこめれ玉のふを  
入んあとも光をわき海枯ひを海をわ  
あおきう一岸流の部は思成のすの  
しも色かやとあふさうりけりさうか  
千顆万顆のみさあう乃板をつつて

きを拍あう海戸の旗乃膝しあふあ  
き地あひくく頼乃おもあひけりく  
あふあう海戸の銀の心をつつきて  
志日悔をいつされさあああああ  
金の山をつつせてハ銀の月光をつつ  
さうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあう



















一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

天 教

是 大 臣 曰

○ 天 教

作る物 大教也 脇人 教を并らす教

是、唐、漢の帝に法を傳へ下す也

は、西の傳ふやうをくまうやうをてま傳ふ乃

民ある一人乃子をまわしそふと天教と

名はくかきとて教とありて尚事には其の

母愛中小天より教ありてより胎内小を

とるも心くおま<sup>ん</sup>子<sup>ん</sup>なま<sup>ん</sup>ん<sup>ん</sup>也<sup>ん</sup> 昔







羅魯に列連く此出を胸め焼く  
中をさるにそを捲く油漬菜をうむ  
芝塔秘師み屋乃ち秘句り我く歌く  
料ありしとありありに終るぬ家海いと  
なを被る部共おもつた思ふ心あを  
さまは着はるもあをも現めもあの中  
そうめさく上りしはるる

と知り心願のく周のうつみ生れ  
て思ふんと思ふらあそ思ふぬありの思  
ひあを唯なふ物へあははる代いのち  
あさう板あをいのら乃らそ板あを

わき  
いふおじ肉おはうまの板あはり  
あつた勅使あく  
勅使あく  
あつた勅使あく  
あつた勅使あく



















海へ舟ひきき支あり。老人を掃ふる  
救の心をよめり。舟をりてありき。舟をりてありき。

舟をりてありき。舟をりてありき。

舟をりてありき。舟をりてありき。

舟をりてありき。舟をりてありき。

面童子王以  
修被平切石園







かゝる其あうのおあすまゝあうれあすま  
の彼を勢あそとらひあうらあうけの  
急のうらまひく縁行のもあう年業六  
有難屋大屋面や西志まおく海風業  
あまやわの風柳葉を拂つて月をま  
すく星とあひ河お争かまや鳥鶴  
れ搖乃りらふ紅葉をまよひ二里のや

上ハこれ前ハお風冷屋ハおあそとあてあま  
らくはもとやありぬらるれあう南星  
おあお措ハお乃あ園のあうらまの彼まふ  
をらすひの境を月ようそふあ水た  
ハあまはつをうら神をうらまやあ物の  
舞あもあ時そてあま乃つ既後とあ  
あまハあうれあめくとあもああ







のを月日知とあくうらまいて取をば入  
 世をいふ我衣もやと見分はの里  
 月夜をやくと見分はの里  
 月のあすまのふつまうてはあゝまのや  
 村取乃ありまらして作是なる唐りふ  
 宿をわらうやと柳ひんふふ月肉  
 葉肉中山 面曲見 一く上 木 葛常座織扇 ま か 松 風 草 露

此宿小海ふとくは西本のあつる唐人  
 色あくくんととめるおふはよとも人  
 一宿をの宿をよひし修へ 実 出 家 の  
 中一宿ハ利益なり久け連はともあか  
 らこそやく彩のあまをあふのちあつる唐  
 てな中とは力をまうる人 ち こ い く











Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in red ink. The script is cursive and appears to be a form of Arabic calligraphy. There are some small red markings and a larger red mark at the top left.

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in red ink. The script is cursive and appears to be a form of Arabic calligraphy. There are some small red markings and a larger red mark at the top left.



















おれは待たぬわかれの世に女はかたじけなく

月夜に白く月影をわとぬのよも

唐子二人小袖ソハツキをまゝ

腰帯唐 一巻半ヨコ

ゆがもあきならあうか

おぢんーそゆうとちり

は我父友人ハ一年日暮れそくせん

まればあふとふとあふ

た十三回おまわ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



























きうーまじりよと日本人也  
たうや新海乃神も納文し  
たうや

いふよ遊子もをりて人あきし  
あきし

あきし  
あきし

あきし  
あきし

あきし  
あきし

あきし  
あきし

いふてまてすー  
あきし

今事ハ口あきし

あきし

あきし

あきし

あきし

あきし

あきし



















一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、































七朝やせきくまの死もさそふまは  
山伏の里と書かぬ竹田の系を  
て流の續橋うけまくと赤のや神宮  
八幡乃里にいふ多りく

懐山小巻の折神の神祕のお細

男よすのせし

一、尉水衣 水桶右持  
二、男水衣 腰帯 袷髪 扇持

上 續乃生高を敷川の波小月と物や枯の

水外山松のせとと神の意乃おわえ  
上 文回と流めんを敷へ書と美し画を  
去半ぎく女流代乃例なる故よ志  
る、油系流とゆあちも又あひひもの  
か、横長の竹交とゆみら書画乃紙  
ひ、さしあし、か、向意の乃度とせ替乃  
海を、鱗のなと、生る物とて、なる



あつて年をいふ東洋の...  
てまゝく...  
まゝの...  
枝を...  
海...  
ハ南社の...  
皆人...  
清浄の...  
あつて年をいふ東洋の...  
てまゝく...  
まゝの...  
枝を...  
海...  
ハ南社の...  
皆人...  
清浄の...

きよあ成よ是成...  
の東...  
乃...  
ま...  
ま...  
と...  
海...  
きよあ成よ是成...  
の東...  
乃...  
ま...  
ま...  
と...  
海...











他の命なりわい人と誓ふを以て神道に交  
る難や我くもあまの清きまをいしを思  
ふ終りのそよ移りしあはれも初めは尚  
れ少法のありし初めを祀の初と告げんと  
の心も洗月乃光も三北夜中し初り終る  
きしりや宗廟乃初め系も代乃す  
成乃と終りし玉皇氏の靈を以てあまの

男山

中  
此由調和四満の波も初あり  
存生の移りしそ世業の初徳も終り  
や男山初り初る格も業も時風也皆  
実おれひききえ終乃山首ぞ初里神  
系懺悔の心も受き免れ初るも神さ  
ひて月もろふの心法も初あさか初折る  
初実遠くも初折るひか初さ初成さよ初入























とらふもて舞らむとて

とあそびて遊ぶもよもよとて

轉好むといふつとてのきこひとて

日け梅乃らあふあつとて

てから夜を伴らうのそめくも

謂と安らむ能やをまじゆと

若もよもよあま娘 非乃山後のみ

とてなる世代おろく今とて  
志系神まうりまけや破の彼おく  
おをよもよのか舞そくはあねく  
舞やあや浦風もねもく  
登迅風彼あふ書もそあやをえ極  
とねとらあ風あやあけやあけ  
あやあふあ花のあはるあ



くあさ<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>けし<sup>ト</sup>じや<sup>ト</sup>梯<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>道<sup>ト</sup>新<sup>ト</sup>なる<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>公<sup>ト</sup>  
道<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>道<sup>ト</sup>夜<sup>ト</sup>ある<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>じ<sup>ト</sup>西<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>毛<sup>ト</sup>毛<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
言<sup>ト</sup>世<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>清<sup>ト</sup>奥<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>  
を<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>め<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>衣<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>織<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>  
う<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>非<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>  
あ<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>非<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>  
世<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ん<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>林<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>道<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>

ち<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>白<sup>ト</sup>落<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>移<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>  
新<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
こ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>移<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
下<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>移<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
探<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
た<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
月<sup>ト</sup>既<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
あ<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>上<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>















海のすくならやらと二程の非業  
やし海の本を地をさし代われば  
志乃西影のさなき時上や下  
なう乃重書れ非魚く 来うからぬ  
海乃まぐくならるるさう書書や使えれ業の  
交化の中肉のうけさく書乃止る  
玉及れ月也老やみさう人く

ゆうをさるめい入尉是凡柄 志乃非のさく  
まもまもさるるさう書乃かまの殿の折の玉  
まこれが家時代ふ多半よと考うれ  
ま書生のあつまれを乃思あやわき せ  
まやふ美信の人とあやをい中いさなる  
まの御幸乃さるふさうかんあふそとさく  
より美信の人と 是ハ信勝の



乃浦小住志あるる為新依り方と云はれり  
天と納交し地と云るなりまはしむるなり  
事り事りわさそとまはしむるむむと云  
なるなるなりなりんたそとがたは  
と云る物そりしやび年すんかまか  
慈となく上さくたれ志とまはしむる  
清くお乃下みせとあはる竹の杖依り

下  
是ら交りあひておびしう物思ふと云はれ  
ふなれ指あはれなり本をまはしむるは  
被りかた白きあまき樹をさるなるは標  
丹乃統又泰山の山下水と云るをまはしむ  
車と云るは推乃本上を上作する  
楊柳 木のまふかさん樹乃本上それ  
秋葉の桐の本上木のまふかさん樹乃本上それ







は西とありし室の名ももはなる者も  
現るもわぬ光の中よりと重なりれを  
死てりきりゆ独不夫なるありて虚を  
おありてて 是ハ伴勝を神交れはけり  
め天海を玉乃神なきも我をおま  
と思りてきて交并を化里あふなり  
如波瀬のありてありて重なりて海  
也

甲乙とあるや雷乃ひらけらふ入を  
その年の神をそゆりてな  
あるへうらあなもを皇乃新代の日  
まられたる一 唯知りてせよ神と云はれ  
外はまへく 龍を重の沙北乃神

中 後々格カリ石 日土  
フタイキハニナ向強 加らふをりてこら

備符 金札 墨岳  
信被伴切勝多ヲ夫







二二二  
三三三

齊茂

吳服

伊予地衣

脇三大臣

舊帽子調友掛原松栢象  
大口脇笏扇つ建同古

道のみらるる時ぞや  
玉葉うたなる

らん 栢は、今ふつと  
玉葉うたなる

我着彩乃子細るふ  
玉葉うたなる

後信くは又是より  
玉葉うたなる

あうまやこ  
玉葉うたなる

浅き波  
玉葉うたなる







ぬらひもなまじく今更清のたうけく  
云のまなれ祀まてとあうりさぬのまえ  
へてをまらうく善し神は妙あるかうりぬ  
我げねあよまて及まは清のた

今有る女性二人の枝をうると二人の糸を  
引ただひまきれ里人と名をよぞとかく  
ふあゝの人そ 犯りやまよの世ある糸

乃湖をうらるる月の影たてて浦波のま  
おまを枝のまをいれへうらるるに  
あまのまをや犯りてやかく何まは  
はみはふまをうらまの里へあてげねあ  
清まをくぐり織はふまをまありの枝を  
紫はあへて何まはひへまを無  
非天をまはまありて是眼をうらあわて











あく吾服の里小倉さへ入連のなる  
棧の神をあるもく七續乃油衣を海物  
役奉りんまうしは教成りおまある  
其のるを分つて表紗を衣乃紋の  
色なるを心鳴らさうつて  
ありまのなるをさへあやとな  
まのなるをさへあやとな  
まのなるをさへあやとな

日  
昔もぬ個なるなり  
よるも服乃文字をなつてけ  
たさのあやたさのや名付を  
年を連へくをなすて續の神乃  
考衣のまをくをなす神なるを  
をひく糸乃海代そ同き  
母付てをばまれくがそ







あつたははのまのあつたははの  
たりふひをわおの紋りしるる  
時代うか けま乃か せせと  
波あまそそゆ家接乃言 神を  
織けは物の中お想字乃字をわう  
衣ら石乃よふ想あはあ 杉の風  
又破うは紋乃言 せせと  
あまそそゆ家接乃言 神を

あつたははのまのあつたははの  
たりふひをわおの紋りしるる  
時代うか けま乃か せせと  
波あまそそゆ家接乃言 神を  
織けは物の中お想字乃字をわう  
衣ら石乃よふ想あはあ 杉の風  
又破うは紋乃言 せせと  
あまそそゆ家接乃言 神を







